ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第31号　2008. 3.31

目　次

九州大学仏教青年会について……2
県立福岡病院の建物について……4
九州大学大学文書館委員会名簿……7
九州大学大学文書館名簿……8
受贈図書一覧……8
大学文書館日誌抄録……9

「京都帝国大学福岡医科大学仏教青年会発会式」（1907年。於東中洲共進館）

京都帝国大学福岡医科大学仏教青年会は、明治40年（1907）5月19日（旧暦4月8日＝釈尊の降誕日）に、学内の学生、看護士、教職員、患者の間に仏教精神に基づき一宗一派に偏せず仏教の妙理を会得させ心の据（すわり）をつけさせつつ、共に社会的ヴォランティア活動に従事していくという目的で創設された。上の写真は、同会発会式の様子である（於東中洲共進館）。この福岡医科大学仏教青年会の伝統は、後の九州帝国大学、そして現在の九州大学仏教青年会の活動に引き継がれている（詳しくは本文の浅田淳一「九州大学仏教青年会について」を参照）。

九州大学仏教青年会について

浅　田　淳　一

当九州大学仏教青年会は、昨年2007年５月19日をもって創立百年を迎えるに至りました。これも九州大学関係者や地域住民の方々その他本会の活動にご理解とご支援を賜った方々のおかげと、厚く感謝いたしております。

本会は、明治40年（1907）５月19日（旧暦４月８日＝釈尊の降誕日）京都帝国大学福岡医科大学仏教青年会として東中洲共進館において誕生しました。これは九州大学が当時は京都帝国大学の一科として設立され、京都帝国大学福岡医科大学と呼ばれていたためです。発会当時は、主として医科大学の教官、学生、看護士、患者等によって組織されておりました。本会の発足は従って、明治25年（1892）東京で大日本仏教青年会が創設されてからは15年、関西仏教青年会の創設からは９年遅れてはおりますが、しかし大学における仏教青年会としては最も早い時期に創立された会の一つと言うことはできるでしょう。このことは何といっても、当時の創設メンバーであった教官方やそれに共感して参加した学生、看護士、患者さん方の深い見識と確固たる意志あったればこそと思います。それらの皆さんは、治療と患者の心の在り方との間に如何に密接な関係があるか、また仏教というものが如何に科学と矛盾せずに、むしろその発達に寄与しうるものであるか、また将来、医師や社会の重要な役割を担うべき学生たちの人格的成長の原点を仏教に置くことが如何に適切であるかを、痛切に感じておられたからでしょう。

本会創立の目的は、医科大学内の学生、看護士、教職員、患者の間に仏教精神に基づき一宗一派に偏せず仏教の妙理を会得させ心の据（すわり）をつけさせつつ、共に社会的ヴォランティア活動に従事していくことでありました。

明治44年（1911）、福岡医科大学は、九州帝国大学と改称され、本会も九州帝国大学仏教青年会と名を改めました。大正７年（1918）より、本会は会長制度をとることとなり、初代会長には旭憲吉博士（医学部皮膚科教授）が就任されました。旭博士は就任後、さらなる会の発展に向けて努力され、同年８月31日博多承天寺内祥勝院に於いて施療院を開設し、自ら診療に当たられ会員にも参加を促されたので、この活動は盛り上がりを見せ、低所得者層の方々や困窮者の方々に大いに感謝されたそうです。

大正10年（1921）には、社団法人に認可され、また旭会長はじめ会員一同の前後５年間にわたる努力と周囲の方々のご支援により、大正15年（1926）３月には福岡市今泉町（現渡辺通４丁目）に会館及び学生寮が建設され、ついで卒業生の独身寮も付設されました。それ以後、会の一切の事業はここで行われるようになりました。その後、同年11月21日には付属中央日曜学校が開かれ、昭和２年（1927）10月３日には法律扶助部（Leagal Aid）を開設し、人間の正当な権利の保護と義務の自覚を促す活動が行われるようになりました。その後、かの忌まわしき戦争と敗戦の苦難の中で、他の大学等の同種の会が、東京大学の仏教青年会を除き殆どが壊滅状態であったにもかかわらず本会は、脈々とその営みを続けてきました。その背景には、旭会長をはじめとする草創期の方々が、法人組織としての体裁を整え、会館と寄宿寮という物質的基盤を確立されたことがあると思われます。

戦後、昭和22年（1947）11月１日には、学制改革に伴い、本会も九州大学仏教青年会と改称し、翌昭和23年（1948）には社会事業法による事業施設としても認められ、施療院を診療部と改め、広く一般に開放すると共に、低所得者には医療費の減免を行い、無料健康相談日をも設け、また夏期休暇を利用して無医村、準無医村への巡回診療や癌の集団検診を行うなど、僻村住民の健康や予防医学の方面にも力を注ぐようになりました。一方、日曜学校や法律扶助部の活動もその範囲を広げていきます。日曜学校は、巡回童話会、花祭り児童大会、遠足、慰問行事等の活動を毎週日曜日に行い、また、日曜学校機関紙を定期的に発行していました。法律扶助部では、定例の夜間無料法律相談を中心として、講演会、判例研究会を主催し、さらに巡回法律相談を行っておりました。これらの本会の活動は会員の情熱と努力の結実であるとともに、国・県からの補助金、民間の住友、三菱などからの社会事業助成金を受けるといった、官民問わずの数多くのご援助によって支えら

九州大学仏教青年会百周年記念行事集合写真（於医学部百年講堂）

れたものでもありました。

そんな中、昭和33年（1958）からの福岡市の戦災復興土地区画整理などの影響や、その他諸般の事情により、渡辺通の会館と寄宿寮の維持が困難となり、渡辺通の土地を売却して、東区名島の九州電力旧グランドの一角に約870坪の土地を譲り受け、会館および寮が建設される運びとなりました。移転は、昭和44年（1969）８月に行われ、同年10月１日より、この新たな拠点で、各種事業が再開されました。

こうして名島の地（現在千早に地名変更）に本拠を移した本会は、地域の要望に応えるために、診療部は夜間診療、無料健康相談を通じ地域住民の健康衛生の向上に努め、また、宮崎県日之影町への無医村巡回検診も好評を博しました。更に、日曜学校は地元子供会との密接な連絡の下、勉強会や夏休みのキャンプなど様々な事業に取り組みました。また、法律扶助部は、県内のみならず、県外からも遠路多数の相談者が訪れ、法律に日常接することのない方々の貴重な拠り所としての役割を果たしてきました。

しかし、時代の変遷は激しく、社会状況は急速に変化を遂げ、本会の行う奉仕活動も、ともすれば時代の要求と合致しなくなりつつありました。さらに学生気質も変わり、年々本会に入る学生数も減少を続け、本会の存亡も危ぶまれるに至りました。

そこで、昭和61年（1986）12月、会館に新たに「九大仏青クリニック」を開設し、仏教精神に基づく一般医療を有料で提供する一方で、そこで得られた収益をもとに、学生を中心とした社会奉仕活動を展開していこうと、大きく方針を転換することとなりました。この「九大仏青クリニック」は、最新の医療設備を備えた診療所であると同時に、他の諸病院のモデルとなりうる様な、地域社会に開かれた奉仕の精神に貫かれた病院経営の展開を目標とするものです。

その結果、バブル崩壊以降、厳しい経済状況を強いられる学生たちに比較的安価にその生活を保証できる体制が整い、また、ヴォランティア活動への社会的コンセンサスも醸成されてきつつある中で、本会への入会を希望する学生数も年々増えつつあるのが現状です。

そうした中、従来は不可能であった女子の入寮が認められ、現在では和気あいあいとした雰囲気の中で、学生たちは自分たちで智恵を働かせて共同生活をしながら、学業とヴォランティア活動に励んでおります。

クリニック開設後の新しい世代の学生たちは、従来の診療部や法律相談部の活動に代わる新たなヴォランティア活動に日々模索しながらも取り組んでおります。例えば、幅広い年代層の方々が触れ合う機会と場所の提供を目指す文化交流部の活動が挙げられるでしょう。地域の独居老人の方々をお招きして食事会や映画上映会を催したり、パソコンに触れる機会を提供したりと、学生たちも色々と悩みながら様々な活動に取り組んでいるようです。

特に昨年は、九州大学に先駆けて、100周年を迎えた本会は、総力を挙げて100周年の記念行事に取り組みました。100周年記念準備委員会を３年前から立ち上げ、ＯＢがバックアップする中で、現役の学生が主体となって準備を進めてまいりましたが、昨年の10月20日に無事記念行事を終えることができました。

記念行事は、そのテーマを「慈のこころ100年」と題し、脳科学者の茂木健一郎氏の講演会「脳と生命」に引き続き、九州大学フィイルハーモニー

管弦楽団の演奏（ウェーバー　オベロン序曲、シベリウス　カレリア組曲）、そして、茂木健一郎氏に、本会会長の戸崎宏正（九州大学文学部名誉教授　インド哲学）、本会ＯＢ牛島定信（東京女子大学教授　精神分析）を加えた３名のパネラーを迎え、司会を本会ＯＢ藤野武彦（九州大学医学部名誉教授　内科）が担当したパネルトーク（心と向き合う―科学と宗教から学ぶ生きるヒント―）という仕方で進行しました。当日は、満員の盛況で、本会が重ねてきた100年間の活動への理解は大いに深まったと言えるでしょう。現在は、100周年記念誌の作成へ向けて準備を進めつつあるところです。

長年、本会の常務理事を務められた故干潟龍祥九州大学名誉教授（インド哲学　学士院会員）は、50周年を記念した文章の中で次のように語られています。

「大学の学生中心の修養の会で、50年も続いている会は、日本中探しても恐らく他にはあるまいと思われます」（創立五十周年記念　会報）と。

このことを思うと100周年を迎えた本会の貴重さに、改めて感動せざるを得ません。何より私が感動を覚えるのは、この100年間、この会の運営や活動が、殆ど九大生の自治によってなされてきたという点です。しかも、この会での経験が、殆どの学生にとって、その生涯にわたって非常に大きな影響を及ぼし続けているのです。若い学生たちが、自分たちで主体的に考えながら、共同生活を営み、しかも様々なヴォランティア活動を通して社会に関わって行けるような場、よく考えてみると、こうした場を100年もの長い間提供しつづけてきた本会のような団体は、干潟先生の言われるように日本中探しても他には一つも見つからないかもしれません。

九州大学自体が移転の時期を迎え大きく変貌を遂げようとしている今、「この本会の貴重な伝統をどのように維持し、伝え、そしてさらに発展させていくか」、これは我々に課された大きな課題です。しかし、このような本会の貴重さ、素晴らしさを考える時、これから九大に入学してくる未来の学生たちのためにも、「皆さんのご協力を得ながら何とかこの課題に答えを出して行かなければならない」と、現在本会の運営の一端を担っている我々ＯＢ一同、覚悟を新たにしている次第です。

（社団法人九州大学仏教青年会評議委員／
筑紫女学園大学教授）

県立福岡病院の建物について

柳　澤　宏　江

はじめに

県立福岡病院は、九州帝国大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学の基盤となった病院である。明治29年（1896）、県立福岡病院は東中洲から福岡県筑紫郡千代村（現在の病院地区）に移転、新築されている。新築された同病院の建物は、同時代の我が国の病院建築について考察する上で重要な事例といえ、また病院が明治新政府下で誕生した建築種別であり、近代化の象徴とも捉えられることから、福岡県の近代建築を歴史的に考察する上でも注目すべき事例といえるだろう。

しかしながら同病院の建物についてはこれまで報告されておらず、遺構も失われている。ここでは管見に及んだ史料によって明らかとなる、明治29年（1896）に竣工した県立福岡病院の建物に関して報告させていただき、同病院の歴史的な重要性について考察したい。

建築の経緯と設計者

県立福岡病院は、明治21年（1888）の福岡甲種医学校の廃校により、同附属病院が改称され開院に至った[*1)]。設立当初の県立福岡病院は、明治10年（1877）に落成した旧福岡医学校の校舎が移管されたもので、病院としては小規模で老朽化した建物と不衛生な敷地といった問題をはらんでいた。これを理由に明治24年（1891）６月から病院移転の計画が進められ、明治29年（1896）に福岡県筑紫郡千代村に新築された[*2)]。新築に際しては、後に京都帝国大学福岡医科大学の初代学長となる大森治豊院長（1852－1912）らが各地の病院建築を視察していたことが知られている。大森は明治25年（1892）２月に上京して東京の病院を視察したが設計案は容易に決まらず、翌年８月に再び上京し、国内15カ所の病院視察を経て、同27年（1894）４月に最終設計案が決定したという。

新築された県立福岡病院については、明治28年（1895）６月の『建築雑誌』*3)に新築報告として設計の経緯と土地、敷地、建物坪数の諸項目と、廊下や床、壁、窓、出入口の仕様、また換気、暗溝、給水といった設備に関して紹介され、配置図と各階平面図が掲載されている（図１、２参照）。同報告によれば、設計者は柴田勝三郎。柴田は皇室建築を担う宮内省内匠寮で技手を勤め、帝国京都博物館（現京都国立博物館）の建築工事（片山東熊設計）の現場主任を担った人物である*4)。

図面にみる建築形態

『建築雑誌』にみる配置、各階平面図によれば、県立福岡病院の建物は南北方向に主軸を構え、南正面に木造２階建ての本館、その後方に薬局、調剤室、浴室、病室を配し、さらに後方に向かって廊下を延ばして本館と並行に病棟を配置している。これら本館と附属する棟の他、敷地西側には解剖室と伝染病室が確認できる。

病院本館は木造２階建て、１階は正面中央に玄関を構え、中廊下の両脇に眼科、内科、小児科、婦人科、外科と各科の諸室を配置した横長の平面構成である。中央の階段を上がって２階には、食堂と会堂がある。同時代の病院と比較すれば、診察室の分科、薬局の独立、男女別に分かれた病棟の配置に共通性が確認できる一方で、類似した実例は確認できない。明治時代、学校付属病院や公立病院の全国的な標準設計や設計基準は規定されておらず、県立福岡病院の平面構成は、各地の病院視察を経て既存の事例を参考としながら、新たに構成されたものと見なすことができるだろう。

これを裏付けるものに、県立福岡病院の竣工と同年に日本建築学会で催された櫻井小太郎の講演会「病院建築法」における辰野金吾の論評がある*5)。辰野は、工部大学校造家学科の第一回卒業生で明治31年（1898）には東京帝国大学工科大学学長となった建築家である。以下に引用して紹介しておきたい。

「近くは建築雑誌に載せて居りましたが福岡の病院、あの病院を拵へるに付て院長大森氏は實例が無いから全國を歩いて諸方の病院を調べられて良いのを選んで彼此折衷されて拵へられつつある、我東京では帝國大學にあります病室を文部省で近来の良い所を取つて造られて居る近来先づ病院の建築はそんな者であります」（下線は筆者による）

辰野のいう「福岡の病院」は、講演の１年前に同雑誌に掲載された県立福岡病院を指す。辰野の指摘は県立福岡病院が各地の病院を折衷し、大森や柴田らの意図によって新たに設計されたことを示すものであると同時に、同病院への建築界の関心の高さを示すものでもある。

また同講演の中で櫻井は、病院の機能性、利便性や衛生上の問題を指摘し、配置、平面構成、寸法、開口部の位置や各部位の仕様について言及している。設計に際して大森が重視した部分も医師としての目線からみた実用的な側面と考えられ、柴田によって設計に反映されたのであろう。

写真にみる建築意匠

明治時代において、病院や銀行など新しい機能の建物は西欧化にはじまる我が国の近代化を象徴するかのように洋風の意匠で建築された。県立福岡病院も規模的、機能的にみて例外ではなかったことは容易に想像できる。

県立福岡病院の意匠については、「玄洋医会」の機関誌である『杏林之栞』*6)に掲載された写真から確認できる。また九州大学大学文書館に現存する福岡医科大学時代の写真（図３参照）にも同一の建物が写っており両写真から正面中央部分の詳しい意匠が把握できる。同病院は寄棟造、左右対称のファサードをもつ洋風の建物で、下見板張りの外壁に欄間付きの上下窓を均等に配置し、中央正面には切妻破風とバルコニー、上部に手摺を廻した車寄せがある。破風飾り、バルコニーの列柱と柱頭装飾、車寄せの迫持といった細部に意匠を凝らしている。

実用性に直接影響する配置、平面構成に対して、写真にみる意匠、特に細部意匠の特徴は設計者である柴田や同時代のデザインの指向性を反映したものといえ、明治時代の建築意匠を考察する上で極めて重要である。

福岡の工匠への影響

明治39年（1906）刊行の「福岡県管内図」（福岡県地域史研究所蔵）の裏面には、神社や製鉄所と並んで、福岡医科大学に移管後の県立福岡病院の建物の写真と住所が掲載されている。同病院の建物は、福岡県のモニュメント的な存在であったと想定でき、福岡県の建物やこれを担う工匠たちにも何らかの影響を及ぼしたと考えられる。

明治時代、福岡で活動していた工匠には、福岡藩の御用大工の家系に生まれ、伝統的な建築技術

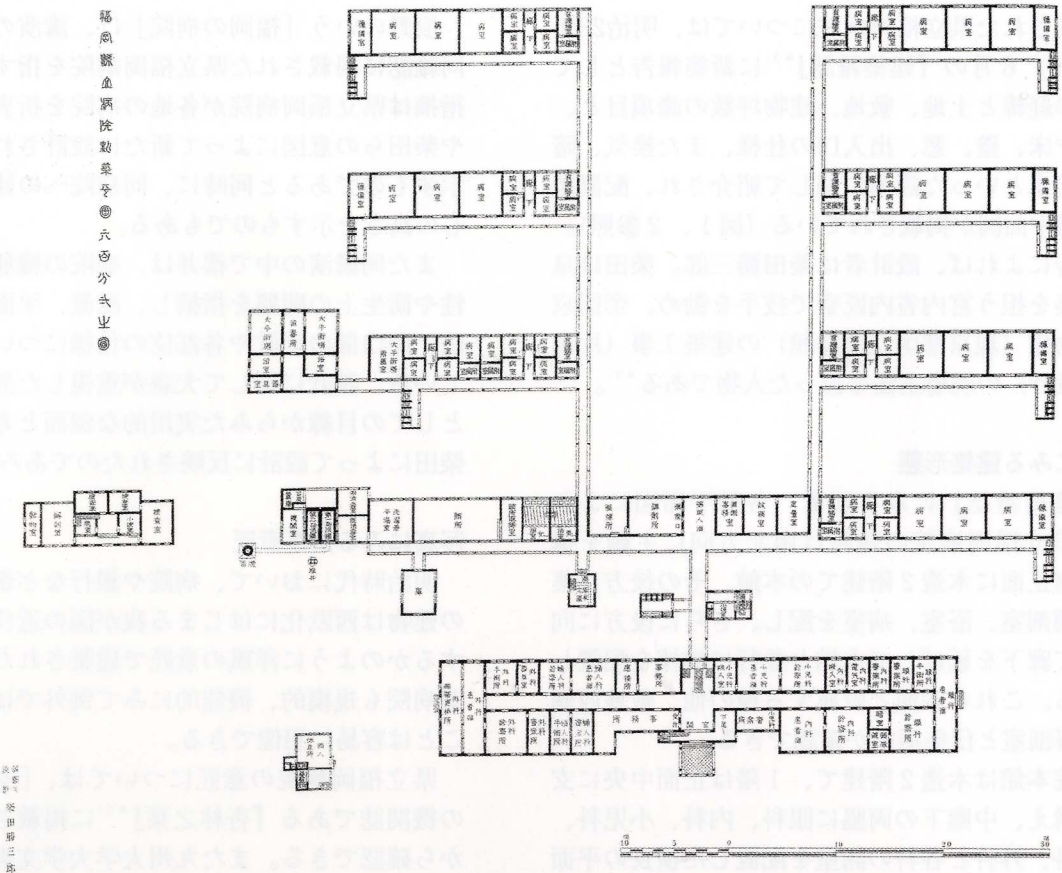

図２．県立福岡病院平面図

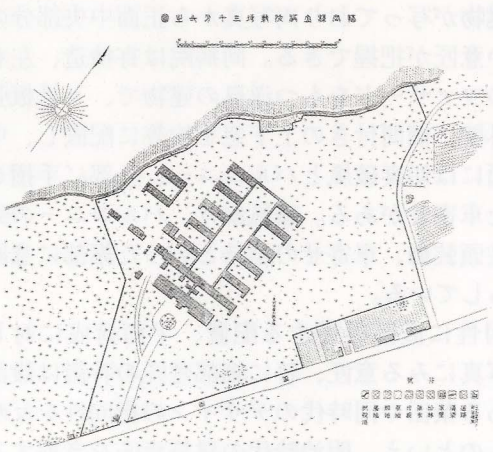

図１．県立福岡病院配置図

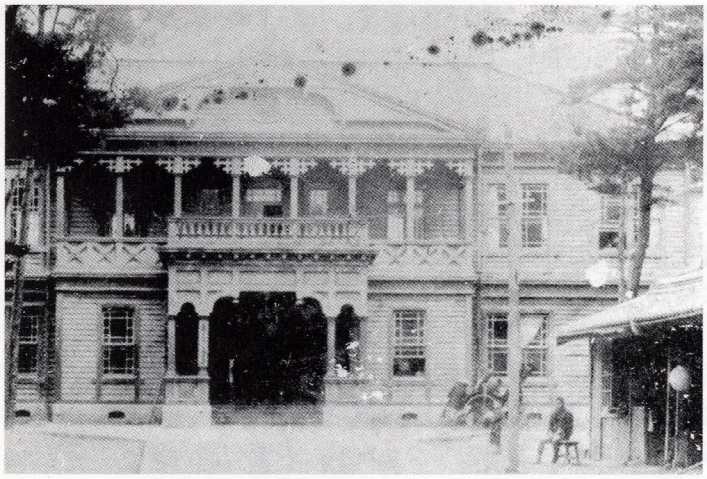

図３．福岡医科大学に移管後の県立福岡病院

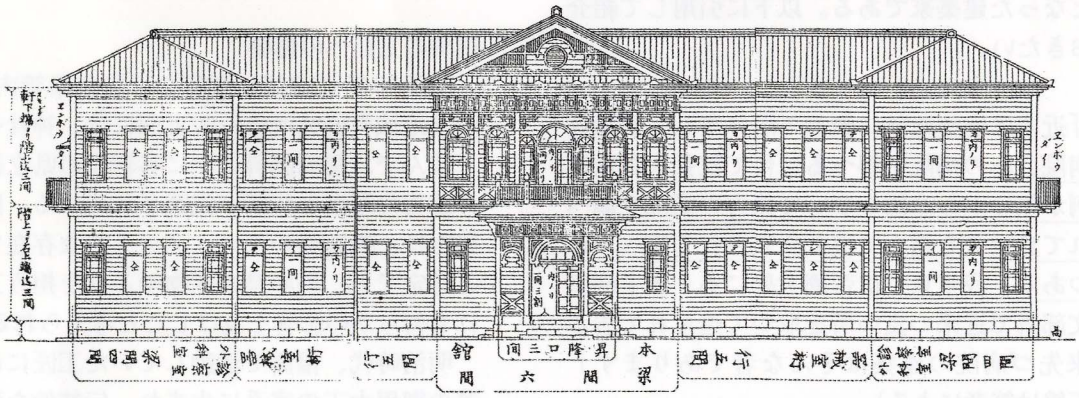

図４．「病院本館」『規矩準縄大匠新雛形大全』

を継承していた亀田吉郎平がいる。亀田は、福岡県土木課設計係に勤務して県立福岡病院、太宰府天満宮に関わったという大工・棟梁で、明治29年（1896）には大工書『規矩準縄大匠新雛形大全』（以下『大全』に略称）を著している。『大全』には、「病院」の事例について、配置、平面、断面、立面図が掲載されているが、このうち立面図にみる意匠は、県立福岡病院の意匠と類似している（図４参照）。特に破風飾り、バルコニーの列柱と柱頭装飾、車寄せは類似しており、稀な意匠である柱頭の装飾は酷似している。亀田が県立福岡病院や柴田とどのように関わったか、詳細は未だ不明だが、『大全』に掲載される病院の立面の意匠は県立福岡病院の意匠を反映したものといえ、亀田が柴田と共通する資料を参照したか、県立福岡病院から意匠を習得したということになる[*7)]。

このような大工書にみる意匠の共通性は、県立福岡病院の建築が福岡県の近代建築に影響を及ぼしていたことを示すものである。

おわりにかえて－福岡医科大学への移管－

新築された県立福岡病院の建物は、福岡医科大学に移管された後、キャンパスの発展により増、改築あるいは新築が繰り返された。『建築雑誌』に掲載される図面をもとに、九州大学大学文書館に保管される「福岡醫科大学創立工事設計ニ関スル書類」にみる複数の図面と比較すれば、福岡医科大学創立時の拡張工事の様子が確認できる。

同書類のうち明治38年（1905）の設計図には、県立福岡病院の本館前方に２棟の建物が描かれている。これを昭和７年（1932）のキャンパス配置図と比較すれば、同病院の本館部分は昭和初期まで存在していた可能性が高い。明治29年（1896）に新築された県立福岡病院の建物の図面、写真が確認できたことによって、福岡医科大学に移管以後の段階的なキャンパスの発展を考察することが可能である。

現在、明治時代の病院について、創立期の建築形態を図面や写真から考察できる事例は稀であり、大学病院として発展する過程を現存する史料によって確認できる事例も僅かしかない。県立福岡病院の建築形態とその変容の過程は、明治時代の代表的な病院建築の実態を示すものといえ、歴史的に重要である。特に同病院の意匠には、明治時代のデザイン的特徴がみられ、同病院の意匠は如何に設計されたのか、設計過程について大森院長による病院視察の軌跡や宮内省内匠寮との関係から考察する必要があるだろう。ここでは重要性を指摘するに留め、今後の研究課題としたい。

（名古屋市立大学芸術工学部研究員）

註記

1）『九州大学五十年史通史』、九州大学創立五十周年記念会、1967年、pp. 1 - 2。
2）註１）pp. 23-30。
3）柴田勝三郎「県立福岡病院新築報告」、『建築雑誌』、第102号、1895年６月、pp. 141-143。
4）柴田は技手となる以前、日給雇図工であった（小野木重勝『明治洋風宮廷建築』、相模書房、1983年、参照）。明治26年２月頃まで濱野牛児と共に帝国京都博物館の工事主任であったが、以後同寮技手柴田勝治、原忠治と交代に東京へ戻っている（『京都国立博物館百年史』、京都国立博物館、1997年、pp. 94-104）。
5）櫻井小太郎「病院建築法」、『建築雑誌』、第113号、1896年５月。
6）『杏林之栞』、玄洋医会、明治30年１月。
7）県立福岡病院と『大全』との関係については、拙稿「『規矩準縄大匠新雛形大全』にみる病院建築の洋風意匠について」、日本建築学会学術講演梗概集、no, 9203、pp. 405-406、2007年８月に詳しい。

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事	副学長	有川	節夫
委員	人環院	教授	新谷	恭明
〃	文書館	教授	折田	悦郎
〃	人文院	准教授	山口	輝臣
〃	経院	准教授	北澤	満
〃	理院	准教授	鹿島	薫
〃	工院	准教授	水永	秀樹
〃	芸工院	准教授	大島	久雄
〃	薬院	准教授	濵瀬	健司
〃	生医研	教授	中山	敬一
委員	比文院	教授	吉田	昌彦
〃	言文院	准教授	高橋	勤
〃	総院	准教授	高曽	徹
〃	応力研	准教授	山本	勝
〃	産連セ	教授	湯本	長伯
〃	博物館	館長	多田内	修
〃	総務部	部長	松本	次好
〃	図書館	部長	濱崎	修一

（2007年12月31日現在）

九州大学大学文書館名簿

館　長	理　事	副学長	有川　節夫
副館長	人環院	教　授	新谷　恭明
専任教員		教　授	折田　悦郎
兼任教員	人文院	教　授	佐伯　弘次
〃	法　院	教　授	植田　信廣
〃	法　院	教　授	熊野　直樹
〃	比文院	教　授	有馬　學
兼任事務職員	総務課長		大土井　智
〃	法令審議室長		百﨑　義隆
〃	総務第二係長		山下　和成
事務職員			山中　一男
事務補佐員			松尾　陳代
〃			筑紫　啓子

（2007年12月31日現在）

受贈図書一覧（2007年７月～2007年12月）

九州大学精神科―百年の航跡
　九州大学精神科教室開講百周年記念事業実行委員会　2006.12

九州大学病院検査部創設50周年記念誌　未来へ
　検査部50周年記念誌編集委員会　2007.10

九州大学歯学部創立三十周年記念誌
　九州大学歯学部創立三十周年記念事業実行委員会　1997.12

研究室余燼
　貝田勝美　1943.2

ジャワ島ところどころ
　森　優　1966.6

戦時体制下の語られざる技術者たち―野中季雄と星子勇
　本山聡毅　2007.11

ふるさと福島に生れて～その半生の軌跡～
　岡増一郎　2007.10

九州大学法学部東京同窓会会報　第11号
　九州大学法学部東京同窓会　2007.10

松の実　九州大学女子卒業生の会　Vol.42
　九州大学女子卒業生の会「松の実」事務局　2007.10

乙酉会会報　第17号
　九州大学乙酉会　2005.12

学士鍋　第143号～第144号
　九州大学医学部同窓会　2007.6、2007.9

燦燦　第十三号
　「燦燦」発行事務局　2007.11

會報　第77号
　九州大学仏教青年会　2007.7

卒業45周年記念誌　るつぼ第５号　人生いろいろ―ある化学徒たちの軌跡―
　九州大学理学部化学科昭和37年卒業生一同　2007.5

緑丘アーカイブズ　第６号
　小樽商科大学百年史編纂室　2007.10

東北大学百年史一　通史一
　東北大学百年史編集委員会　2007.10

東北大学史料館だより　No.7
　東北大学学術資源研究公開センター史料館　2007.9

東京大学史史料室ニュース　第39号
　東京大学史史料室　2007.11

京都大学大学文書館だより　第13号
　京都大学大学文書館　2007.10

神戸大学史紀要　第７号
　神戸大学百年史編集委員会　2007.3

広島大学五十年史　通史編
　広島大学50年史編集委員会　2007.3

広島大学文書館紀要　第九号
　広島大学文書館　2007.3

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2005年度・2006年度　第12号／第13号
　宮城学院資料室運営委員会／宮城学院資料室　2007.3

関東学院学院史資料室ニューズ・レター　第11号
　関東学院学院史資料室　2007.10

慶應義塾福沢研究センター通信　第７号
　慶應義塾福沢研究センター　2007.9

史料室だより　第13号
　恵泉女学園史料室　2007.11

国士舘九十年
　国士舘九十周年記念誌編集部会　2007.11

成蹊学園史料館年報　二〇〇六年度　通号５号
　成蹊学園史料館　2007.3

大東文化歴史資料館だより　第３号
　大東文化歴史資料館　2007.11

中央大学百年史編集ニュース　第三十七号

中央大学百年史編集委員会専門委員会　2007.9
東海大学学園史ニュース　No.2
東海大学学園史資料センター　2007.10
湘南キャンパス創生
東海大学学園史資料センター　2007.10
立教学院史研究　第5号
「立教学院史研究」編集委員会　2007.10
愛知大学東亜同文書院ブックレット別冊　愛知大学創設期の群像　写真集
愛知大学東亜同文書院大学記念センター　2007.4
HOMINIS DIGNITATI 1932-2007　南山学園創立75周年記念誌
南山学園創立75周年記念誌編纂委員会　2007.11
大谷大学真宗総合研究所研究所報　No.50～No.51
大谷大学真宗総合研究所　2007.5、2007.10
立命館百年史　資料二
立命館百年史編纂委員会　2007.7
関西大学百二十年史
関西大学年史編纂委員会　2007.3
山は動かず
近畿大学世耕弘一先生建学史料室　2007.7
ノートルダム清心女子大学五十年史　附：ノートルダム清心女子大学五十年史資料編
ノートルダム清心女子大学五十年史編纂委員会　1999.5
アーカイブズ　第29号～第30号
国立公文書館　2007.7、2007.10
国立公文書館年報　第36号
国立公文書館　2007.9
全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報　第79号
全国歴史資料保存利用機関連絡協議会　2007.8
DJIレポート　No.71～No.72
国際資料研究所　2007.7、2007.10
記念館だより　第43号
旧制高等学校記念館、旧制高等学校記念館友の会　2007.10
北海道立文書館報　赤れんが　No.43
北海道立文書館　2007.12
神奈川県立公文書館だより　第18号
神奈川県立公文書館　2007.9
和歌山県立文書館だより　第21号～第22号
和歌山県立文書館　2007.7、2007.11
広島県立文書館紀要　第9号
広島県立文書館　2007.3

＊大学史・高等教育史、アーカイブ関係図書を中心に受贈図書の一部を掲載した。

大学文書館日誌抄録（2007年7月～2007年12月）

7．9（月）小泉直彦氏より資料寄贈。
7．11（水）元大学院人文科学研究院特任助手、資料調査のため来館（7月18日、8月3日、8日、17日、9月5日、28日、10月10日、18日、31日、11月7日、28日、12月7日、10日、14日、28日も同様）。
7．13（金）ＮＨＫ放送記者、資料調査のため来館（24日も同様、福岡大空襲の件）。
7．19（木）病院事務部総務課より資料移管。吉川幸作氏来館、資料寄贈。
7．26（木）大学院人文科学府学生、資料調査のため来館（9月12日、13日も同様）。
7．30（月）西日本新聞社記者、取材のため来館（箱崎地区の件）。
8．4（土）折田悦郎教授、第26回日本教育史研究会サマーセミナーに参加（～5日。「大学誘致運動と九州大学」を発表。於筑波大学）。
8．17（金）大学院言語文化研究院教授、資料調査のため来館。九州工業大学附属図書館史料室より資料調査のため来館（20日、9月4日、11月20日、12月6日も同様）。
8．24（金）財務部資産管理課より資料調査のため来館。
8．29（水）大学院工学研究院教授、資料調査のため来館。
8．31（金）名古屋市立大学芸術工学部研究員、資料調査のため来館。
9．3（月）第1回九州大学百年史編集委員会開催（折田教授出席）。福岡市内設計事務所より資料調査のため来館。
9．5（水）大学文書館、工学部本館1階への学内移転準備開始（～10月5日）。
9．7（金）同志社大学嘱託講師、資料調査のため来館。

旧制福岡高等学校同窓会（青陵会）より来館（資料貸出）。
中山宏明名誉教授来館、資料寄贈。

9．8（土）折田教授、第231回中国文芸座談会に参加、郭沫若関係資料につき説明（於文学部会議室）。

9．14（金）谷口宏名誉教授来館、資料寄贈。

9．18（火）伊東正夫氏より資料寄贈。

9．19（水）医系学部等事務部総務課より資料移管。

9．21（金）朝日新聞社より電話取材（工学部本館の件）。

10．2（火）大学院比較社会文化研究院教授、資料調査のため来館。

10．9（火）第6回九州大学大学文書館委員会（書面回議）。

10．10（水）折田教授、旧制福岡高等学校創立85周年記念祭に参加（於ソラリア西鉄ホテル）。

10．12（金）西日本新聞社記者、取材のため来館（箱崎地区について）。

10．15（月）関西大学大学院文学研究科学生、資料調査のため来館。

10．20（土）折田教授、2007年度九州史学研究会大会に参加（～21日。於九州大学国際ホール）。

10．22（月）ノートルダム清心女子大学資料編纂室より大学文書館視察のため来館。
東北大学百年史編纂室より資料調査のため来館。

10．24（水）アジア総合研究機構研究支援室より資料寄贈。

10．30（火）大学院芸術工学研究院助教、資料調査のため来館。

11．2（金）福岡市内設計事務所より資料調査のため来館。
朝日新聞社より電話取材（本部事務局建物の件）。

11．7（水）九大フィルハーモニー・オーケストラより資料寄贈。

11．12（月）林正巳氏、貴志弘氏来館、林氏より資料寄贈。

11．14（水）大学院工学研究院海洋システム工学部門（旧造船学教室）より資料寄贈。

11．15（木）『九州大学大学文書館ニュース』第30号刊行。

11．19（月）国立台湾大学図書館、校史館より大学文書館視察のため来館。

11．21（水）江頭和彦大学院農学研究院教授より資料寄贈。
情報基盤研究開発センター情報システム部情報基盤課より資料寄贈。

11．23（金）第2回「ホームカミングin六本松」の一環として、「九州大学の歩み写真展」開催。

11．27（火）松村晶大学院工学研究院教授（九大フィルハーモニー・オーケストラ顧問）来館、資料寄贈(12月19日も同様)。

11．28（水）財務部調達課より資料移管。

12．5（水）国際交流推進室より資料調査のため来館。

12．12（水）重野鎮義氏、中里公哉氏来館、重野氏より資料寄贈。

12．13（木）文学部美学・美術史研究室より資料調査（実習）のため来館（12月25日も同様）。

12．25（火）埼玉大学教養学部准教授、資料調査のため来館。

12．27（木）総務部総務課広報担当より資料移管。
水崎雄文氏来館、資料寄贈。

九州大学大学文書館ニュース　第31号

Kyushu University Archives

発行日　2008年3月31日（年2回刊）
編集
発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
Tel：092-642-2292　Fax：092-642-7646
印刷　株式会社ミドリ印刷